ぱちぱちぼいす

無口で大人しい後輩が俺の股間に興味津々な件

収録台本・購入者様特典 ver.

※一部製品音声と異なる場合がございます。予めご了承くださいませ。

//★タイトルコール～イントロダクション

瑞樹「ぱちぱちぼいす」

●あらすじ

瑞樹「無口で大人しい後輩が、俺の股間に興味津々な件」

瑞樹「主人公である先輩は、同じ図書委員に所属している仲。今までは必要最低限のコミュニケーションしかとっていなかったが」

瑞樹「読書で学んだ性行為の知識が、実際にどのような快楽をもたらすのか……。それを知る為にアプローチをかけてみることに」

瑞樹「普段大人しそうな娘ほど、一度目覚めたら性の虜。人気がないのを良いことに、図書室であらぬプレイに発展していく……」

//★トラック1：私にセックスを教えてください

●図書室内

瑞樹「お疲れ様です、先輩」

瑞樹「少しお聞きしたいことがありまして、……お隣、失礼しますね」

瑞樹「それで、せんぱ……ってなんですか、その怪訝そうな目は。私から話しかけれたのがそんなに珍しいですか？」

瑞樹「はぁ、もしかして先輩って、私のことを無口で無愛想な女だと思ってないですか？　確かに、普段はあまり自分から話しませんが……それは、話す必要がないからで、必要があれば私だって喋ります」

瑞樹「それで、相談なんですが」

瑞樹「先輩は、セックスの経験をお持ちですか？」

瑞樹「えーと、……質問の意味をご理解いただけなかったでしょうか？　すみません。もう少しわかりやすく説明しますね。　先輩は、ご自身の肉棒を、女性の秘部に挿し込まれた経験がお有りですか？」

瑞樹「……なんとか仰ってください。これでは、何も分かりません」

瑞樹「そんなにおかしな質問だったとは思えないのですが。性経験を尋ねる機会も、人生の中では少なくないと思いますし」

瑞樹「実は、今回読んでいた本の中で、男女のセックス描写がありまして、それで先輩にお聞きしたかったんです。　……あぁ、今は何も仰らなくて大丈夫ですよ。『なんて本を読んでんだコイツ』、と顔に書いてありますので」

瑞樹　「まぁ、というのもつい最近、官能小説に手を出し始めたんです。面白いですよね。布団に残った女性の残り香で興奮したりしていて」

瑞樹　「ですが、そのような描写は、だいたい男性視点で女性がどう興奮するのかは書かれていなくて……、それで興味があって、女性視点での小説も読み始めてみたのですが」

瑞樹　「ただ、読み始めてから自分に性行為の経験がないこともあって。男性器が女性器に挿入され、膣内に射精をして着床（ちゃくしょう）を企（たくら）む行為。それの何が気持ち良いのか、全く想像できなくて……」

瑞樹　「なのでまず、経験者からお話が聞ければと考えたのですが……しかし、困りましたね。先輩が経験したかどうか答えてくださらないとは」

瑞樹　「え？　揶揄（からか）ってるのかですって？　とんでもない。至って真面目に聞いてます」

瑞樹　「私、気になったことはとことん調べないと気が済まないんです。で……どうなんですか？　先輩はそういった経験があるのですか？」

瑞樹　「ふむ……童貞ではない、と。なるほど、つまりセックスの経験があるというわけですね」

瑞樹　「それで……実際セックスって気持ちいいのですか？」

瑞樹　「先輩はあるのですよね？　男性器を女性器に挿入したことが。それってどのように気持ちいいのですか？」

瑞樹　「ちなみにですが、お相手は処女でしたか？　それとも慣れた人です？　締め付け方に違いがあるそうですが……。あ、あと　避妊具。コンドームは付けていましたか？　その有無も参考までに……！」

瑞樹　「……っと、すいません。少々熱が入ってしまいました。」

瑞樹　「（軽い咳払い）まぁ、私と先輩とでは性別が違うので、セックスの気持ち良さ、感じ方は異なってきますが、　一意見として先輩の経験を参考にさせて頂けませんか？」

瑞樹　「ん？……えーと、すみません、先輩。良く聞こえなかったので、もう一度言ってもらってもいいですか？」

瑞樹　「えー、……童貞ではないというのは嘘で、セックスどころか女性と付き合ったこともない……、と。　成程、やはり嘘でしたか」

瑞樹　「……何故わかったか、ですか？　まぁそうですね。先輩の反応そのものが、私の知っている　童貞男子の特徴に当てはまっていたので、薄々勘づいてはいた……というところでしょうか」

瑞樹　「しかし……、本当に困りましたね。先輩以外にこんなことを聞ける相手もいないですし……。　それに、まわりの女子に話すのも乗り気ではないんですよね」

瑞樹　「って、先輩。何か言いたげですね。……女友達がいないのか？　違います。いないのではなく必要ないので作らないというだけです」

瑞樹　「……まぁ、そのせいもあって今現在、女性からの意見が聞けないというのは事実ですが」

瑞樹　「（溜息）とはいえ、こんなに喋ったのは、久しぶりかもしれません」

瑞樹　「再三ではありますが私、気になったことはとことん調べないと気が済まない質（たち）で」

瑞樹　「普段なら本を読むなり調べれば解決するんですが、今回ばかりはそういうわけにもいかなくて」

瑞樹　「なんと言っても、セックスには相手が必要ですし、一人で道具を使って試してみたのですが、どうにも本に書いてあることとはズレがありまして」

瑞樹　「男性とのセックスを想定して、女性用の自慰器も購入して試してみたのですが、　小説で書かれていたようなオーガニズムを得ることはできなかったんですよね」

瑞樹　「それで、先輩に色々と聞いてみたくなったんです。私が図書委員になったばかりの頃も、いろいろと教えてくださいましたし、　先輩ならきっと相談に乗ってくれるだろうと思ってましたので」

瑞樹　「しかし、本当に困ってしまいました……。頼りの先輩も当てが外れてしまいましたし、小説の内容についても　気になって夜も眠れない……というほどではありませんが、やはりモヤモヤとした気持ちは残ってしまいます」

瑞樹　「そこで、先輩。もう一つ相談なのですが……」

瑞樹　「（耳打ちにてささやくように）私とセックスしてくれませんか？」

瑞樹　「……やっぱり揶揄（からか）ってるのかですって？　とんでもない。至って真面目に聞いてます」

瑞樹　「先輩も童貞を卒業できて、私の問題も解決する。お互いにウィンウィンで良いことづくめだと思うのですが」

瑞樹「幸いにもこの時間に図書室を利用するなんて人もいませんし、最奥の部屋であれば声が漏れるということも　ないでしょう。貴重書籍室の鍵も……委員長である先輩がもってますし」

瑞樹「まぁ、先輩が私に興味がないというのであれば、残念ながら諦めるしかありませんが、　無知な私に、男女の営みについて学ばせてはくれませんか？」

●図書室の更に奥にある貴重書籍室

／／★トラック２：ここでなら少しぐらい音を立てても大丈夫そうですね

瑞樹「ふふ……、先輩も男の人で安心しました。……いえ、深い意味はないですよ」

瑞樹「とはいえ先輩、先ほどとは打って変わって無口ですね。まぁ、童貞と処女ということで　私も少しばかりは緊張しているのですが」

瑞樹「よく考えれば、私がお願いした立場ですし、小説での知識にはなりますが、私のほうから　リードしないといけないですね」

瑞樹「それじゃぁまずは、先輩の肉棒を私に見せてくださいますか？」

瑞樹「……ん？、どうしましたか？きょとんとして……なにかおかしかったでしょうか？」

瑞樹　「あぁ、世間一般的には、おちんちん、とか、おちんぽでしたかね」

瑞樹　「おちんぽのほうが響きがかわいいですし、それでは改めて……」

瑞樹　「先輩の肉棒を私に見せてくださいますか？」

瑞樹　「ふふっ、そんなにはずかしがらないでください。それに、先輩の股間、ズボンの上からでも少し、もっこりとしているじゃないですか」

瑞樹　「想像するだけでも反応しちゃうんですね。本の知識として知ってはいましたが、こうやって間近でみると驚きです」

瑞樹　「ほら先輩。早くおちんぽを見せてください」

瑞樹　「私も男性のおちんぽをまじまじと見るという機会はないので、ワクワクします……って、なんでパンツで止めるんですか」

瑞樹　「……分かりました。先輩がそこまで初心（うぶ）だというのでしたら、もういっそ、私が先輩を脱がせます」

瑞樹　「こういうの『ご奉仕』とも言えるでしょうし、そういう小説も読んだことがあります。よく考えれば、これもいい経験ですね」

瑞樹　「それでは失礼します。って、ふふっ……ズボンを脱ぐと一層股間の膨らみがハッキリしてて　おちんぽの形がわかりますね」

瑞樹　「それじゃぁ先輩、パンツを下げますんで片足ずつ上げてください」

瑞樹　「んしょ……、もう片方……っもっと、はい、よくできました。じゃぁパンツはズボンと一緒のところに置いておきますね」

瑞樹　「……ふむふむ、これが、おちんぽ……」

瑞樹　「……見た目は本で読んだ通りですね。怖いと感じる女性もいるみたいですが、私は……なんでしょう、可愛らしく見えます」

瑞樹　「匂いは……くんくん……臭くは、ない……かな？　ちょっと独特な匂いがします。　せっかくなので触らせてもらいますね？」

瑞樹　「ふんふん……あっ、思ったよりも柔らかいのですね。でも芯があって、そこはコリコリとしています」

瑞樹　「それでいて、先っぽは……亀頭、でしたよね。本当にキレイなピンク色……」

瑞樹　「そんなに観察しないでくれって言われても、無理ですからね。本で得た知識と実物を照らし合わせているのですから」

瑞樹　「先輩は、大人しく観察されていてくださ……ああ、いえ、これはご奉仕でしたね。言い直しましょう」

瑞樹　「メイドのご奉仕シゴキで感じながら、情けない顔を晒していてください。ご主人さま」

瑞樹　「なんて、これも本の受け売りですが」

瑞樹　「あ、あれ……？　先輩、その……」

瑞樹　「なんだかおちんちんがさっきより大きくなっているように見えるのですが、私の気のせいでしょうか……？」

瑞樹　「もしかして……これが本当の勃起？」

瑞樹　「ということは、さっきのセリフに興奮したということですか？　どの要素で興奮されました？　メイド要素かややマゾヒスティックな描写か……」

瑞樹　「目をそらしても無駄ですよ……。さっきので限界だったんじゃないんですか？」

瑞樹　「さては、まだ本調子ではありませんね？　もっと大きくなるのでしょう」

瑞樹「本気の勃起、見せてもらってもいいですか？　先輩」

瑞樹「そのためになら私、なんでも協力しますので」

瑞樹「ふんふん……、ゆっくりしごけばいいんですね？　わかりました」

//★トラック３：先輩のおちんぽを見せてください

瑞樹「んっ、こんな感じ……でしょうか……？　皮が動いて、先っぽが見えたり隠れたりしちゃってますね」

瑞樹「でも、どんどん大きく固くなってきているのを感じます。間違ってはないみたいですね」

瑞樹「ふふっ、私の手で、先輩のおちんぽが、勃起するなんて」

瑞樹「気持ちいいですか？　私の手で、エッチな気持ちになってきちゃいましたか？」

瑞樹「……ふふ、だんまりを決め込んでも体は正直とはこのことですね？　先輩は私の言葉でも興奮してくれる。　貴重な情報です――ええ、先輩のおちんぽは、ですが」

瑞樹「先輩はずっと声を殺していて、全然正直ではありませんし。その点おちんぽは素直でいいですね。」

瑞樹　「先輩のおちんぽ、カッコよく勃起できていますよ？」

瑞樹　「ふふっ、これでも大きくなるんですね」

瑞樹　「それにしてもすごいです。おちんぽは勃起すると大きくなるのは知っていましたが、これほどとは……」

瑞樹　「亀頭も大きく膨らんで、陰茎もずっと硬く、そして長く伸びています……あっ、尿道もぼこっと浮き出ていますね」

瑞樹　「それに、余っているように見えた皮も、こうして勃起するとちょうどいい具合になっているのが驚きです」

瑞樹　「さて、先輩。次はもう少し強く握ってみても大丈夫ですか？」

瑞樹　「ありがとうございます。では、失礼して……んっ、ん……すごいです、海綿体に血液が流れ込むとこんなに　固くなるんですね」

瑞樹　「それにすごい熱くて……あ、先っぽから透明な液体が垂れてきていますね」

瑞樹　「これはもしかしなくとも、カウパーとも我慢汁とも言われている液体ですよね」

瑞樹「ふむ、思ったよりねばねばしていますね。それにすごい伸びる。まるで蜘蛛の糸みたいです」

瑞樹「この液体には、尿道器官を洗浄する働きがあって、性的興奮状態じゃないと分泌されないそうですが、　先輩は知っていましたか？」

//★トラック４：こちらのカウパーは美味しくいただかせてもらいますね

瑞樹「ふふ……つまり先輩はこの状況にしっかり性的興奮をしているというわけですね」

瑞樹「私で興奮してくださりありがとうございます。こちらのカウパーは美味しくいただかせてもらいますね」

瑞樹「それでは」

瑞樹「んっ……れろっ……ん、ちゅっ……」

瑞樹「ん、んんっ……仄（ほの）かにしょっぱい……と言ったところでしょうか」

瑞樹「指で触ったときはねばねばがすごかったですが、口にしたときはそうでもないですね」

瑞樹「先輩。一舐めだけじゃ情報が足りないので、もっとたくさん出してくれませんか？」

瑞樹　「……黙ってるだけじゃわからないですよ？　先輩。それならこのままいっぱい気持ち良くしてさしあげますね？」

瑞樹　「んっ……ちゅむっ、ん……れろ……れろっ、んちゅっ……」

瑞樹　「んちゅっ、ん……れろっ、ぁ……んんっ、ふ、ぁ……」

瑞樹　「はぁっ、ぁ……予想通り、先っぽから我慢汁が出てきていますね」

瑞樹　「カウパーには女性の膣内への挿入をスムーズにして、精子を子宮に届きやすくする働きもあるそうですが」

瑞樹　「先輩は童貞ですから、こうして舐められるのは初めてでしたね」

瑞樹　「初めての快感により興奮してしまっている顔も可愛らしいですが、まだ満足しちゃダメですからね……？」

瑞樹　「もっと試したいことがあるんですから、私が良いと言うまで勃起し続けてください」

瑞樹　「先輩で男性の性感帯についてもいろいろと試させていただきますので、……それでは今度は咥えてみます……ね？」

瑞樹　「はむっ、んっ……じゅぷっ、んぅ……んっ、ん……んはぁっ」

瑞樹　「んっ、んはぁっ、あむっ……んんっ、ふぁっ、あっ……じゅぶっ、ちゅ、んぅ……」

瑞樹　「へんはいのおふぃんふぉ……ほぉおきふぎれふぅ（先輩のおちんぽ大きすぎです）」

瑞樹　「んっ、ん、ん、んぁ……はぁっ、はぁっ、あぁ……」

瑞樹　「んっ……ふふっ、咥えているだけでアゴが疲れてしまいそうです」

瑞樹　「あむっ……じゅぷっ……ん、ちゅ……んぅん」

瑞樹　「ん……ちゅっ……そうだ、先輩。タマをにぎにぎしながらだと……どうですか？」

瑞樹　「じゅる……じゅぶ、んんぅ……ちゅ…ふふふ」

瑞樹　「腰が仰け反ってきましたよ？」

瑞樹　「それと、時々おちんぽがビクってするんですが、これは射精が近いという合図でいいでしょうか」

瑞樹　「ふふ……出したいですか？　先輩。……えぇ、いいですよ。　ただし、射精するときはちゃんと言ってくださいね？」

瑞樹　「おちんぽの先端からどのように精液が飛び出ていくのかもじっくり観察しておきたいので」

瑞樹　「約束ですよ。では、続けますね」

瑞樹　「はむっ、んっ……じゅぷっ、ん、じゅる、んんっ……」

瑞樹　「んーっ、へんはいのおふぃんふぉわはひのくひのなかでふごきまわっへまふ」

瑞樹　「わらしのしはれ、うほきをほめ……んっ、らめ、みたいです」

瑞樹　「んはぁっ、あっ……先輩のおちんぽ、元気過ぎますよ、んもう……」

瑞樹　「あむっ、んんっ、じゅるるるっ、んんんっ、くっ、んぐぅっ！」

瑞樹　「んっ、ちゅむっ、んはぁっ……」

瑞樹　「んっ……どんな風に舐めて欲しい、とか気持ちが良いとかがあれば忌憚ない意見をいただきたいところですが」

瑞樹　「そんなことよりも続きを早くって感じですね？私がしゃべってる間にもどんどんカウパーが滲みでてきてますし」

瑞樹「特に希望がなければ、私の方から勝手にしてしまいますよ？　先っぽの方を、舌で念入りに、とか」

瑞樹「んっ、じゅぶっ……ちゅぶっ……じゅぶぶっ、じゅぶっ……んぁ……」

瑞樹「じゅるっ、じゅぶっ、ぁ……は、ふぁ……じゅるぶっ、んちゅぶっ……んはっ」

瑞樹「ふふっ、先輩ってば今度はすごく気持ち良さそうな顔をしていますね」

瑞樹「それにおちんぽも、心なしか喜んでいるように見えます……」

瑞樹「それとも、この力み（りきみ）は我慢の証でしょうか……？」

瑞樹「もし我慢しているとなると、もう一つ気になっていたことがありまして」

瑞樹「おちんぽが射精しそうになると、玉袋が縮み上がるとあったのですが……あっ」

瑞樹「本当に縮み上がっています……つんつん……パンパン、とは言えないですが、先ほどよりどこか張り詰めている感がありますね」

瑞樹　「ずっと張っていると疲れてしまうでしょうし……今度はタマを揉みながらおちんぽを同時にしごいてあげます。」

瑞樹　「じゅるり……ちゅ……ぱ（右手）……じゅ……じゅぶっ……ちゅ（左手）」

瑞樹　「ローション代わりではないですが、手でしごくとなると摩擦で痛くしてしまうかもしれませんので、手に唾液をつけさせてもらいますね」

瑞樹　「……ふふ、そんな期待に満ちた目をしないでください。（両手を先輩の耳に添えてやさしくなでながら）この両手で先輩をスッキリさせてあげますから……ふぅ～（耳にやさしく息を吹きかける）」

瑞樹　「それじゃぁ、いきますね……もみもみ……しこしこ……ふふっ、全身ビクビクしていますけどそんなに気持ち良いですか？」

瑞樹　「それにほら、先輩。だらしない声がでてきてますよ？　聞こえないかもとは言いましたが　もう少ししっかり踏ん張らないと、通りがかった人にバレてしまうかもしれません」

瑞樹　「ふふ……耐えている先輩の顔も可愛らしいです。しこしこ……しこしこ……腰も強張ってますよ？」

瑞樹　「もみもみ……しこしこ、……痙攣の頻度も短くなってきましたね。出そうですか？　出そうなんですね？」

瑞樹　「……わかりました。ただ、……ここに来て少し悩んでいるんですが、先ほど、おちんぽから精液が飛び出すところを見たいと言いましたが、　読み得た知識の中には、口の中に出すという描写もありまして」

瑞樹　「味もそうですが口内射精の勢いなども感じたいなどと、とても悩ましく……」

瑞樹　「せっかくなので先輩が望む方法にしたいと思うのですが……」

瑞樹　「私の手コキで射精するのと、お口の中で射精するのと。どちらが良いですか？」

瑞樹　「……わかりました。お口ですね」

瑞樹　「ではいっぱい気持ち良くしてあげます。ですが、イク前の合図だけは忘れずにお願いしますね？」

瑞樹　「では……あむっ、んちゅっ……」

瑞樹　「んちゅっ、んっ……ちゅむっ、むちゅるっ、んちゅっ……」

瑞樹「ちゅむっ、ぁ、んっ……じゅるっ、じゅるるるっ……ん、は、ああっ……」

瑞樹「れろっ、れろれろっ……ぁ、は、ふ……むちゅっ、ん……」

瑞樹「ちゅぷっ、んっ……んっ、んっ、んっ、んっ……んはぁっ……」

瑞樹「せっかくなのでこっち……裏スジのほうも舐めてげますね……？」

瑞樹「れろっ……れろれろっ、ん……んちゅっ、ちゅぶるっ、じゅっ……」

瑞樹「ちじゅっ、じゅるっ……んんっ、れろっ、れろんっ……ちゅむっ、むちゅっ……」

瑞樹「んっ、こっちも気持ち良いみたいですね……おちんぽの反応でわかります……」

瑞樹「ではお稲荷さんのほうはいかがでしょうか……あむっ」

瑞樹「んじゅるっ、んんっ、んぁ……じゅむるっ、じゅちゅっ、んじゅるっ……んんっ」

瑞樹「んちゅっ、は、ぁぁ……ぺろっ、ぺろぺろっ、ん、れろんっ……んぁ……」

瑞樹「こちらも悪くない反応です。つまり、先輩のおちんぽは全体が性感帯ということですね……？」

瑞樹「一番気持ち良さそうだったのは、竿を咥えながら亀頭を舌でクリクリしてあげたときでしょうか」

瑞樹「改めて気持ち良くしてあげますので、射精のほう、よろしくお願いします……はぁむっ」

瑞樹「じゅるるるっ、じゅちゅっ……んっ、はぁっ、あっ……」

瑞樹「はぁむちゅっ、んっ……じゅぶる、じゅるるる、じゅる……んんっ、ぁ、はぁっ……」

瑞樹「んんっ、ちゅむっ、はぁっ……れろれろれろんっ……はぁっ、ふ、ちゅっ、ぁ……はぁっ……」

瑞樹「はちゅぷちゅっ……んちゅぁっ、ん……じゅぶ、じゅるるるっ、じゅるん……んぁっ……」

瑞樹「れろ……れろれろっ、れろんっ、ぁ……んちゅっ、ちゅぷっ、ちゅぱぁっ……じゅぶっ、じゅぶるるるっ」

瑞樹「ふぁい……でほうなんれふね？　どうぞ……わらしのおふちに、いっぱい、らしてくらはい……」

瑞樹「んっ、んんっ！　ん、んん～～～っ！！」

瑞樹　「んんっ、んじゅるっ……んっ、ん……ごく、ごくんっ！」

瑞樹　「ん、ふぅ……先輩の精液、すごく……まずいですね……それにどろどろで飲みにくいです……」

瑞樹　「……飲まなくても……といわれても、それはのどごしが気になったので致し方なく――今更言われても、というところではありますが」

瑞樹　「ちなみに口内射精された感覚は……まぁ、悪くなかったですね。口内射精ならではの感触としか言えませんが」

瑞樹　「先輩はどうでしたか？　図書館でバレないようにしながら、女の子に性器を握らせていた気分は」

瑞樹　「……少なくとも私には、そんな仏頂面になる理由など分かりませんが。もしかすると賢者タイムというものでしょうか？」

瑞樹　「でしたら仕方がありませんね。逆説的ですが、賢者タイムにいるのでしたら、気持ちよかったということでしょう」

瑞樹　「上手くご奉仕できたようで何よりです」

瑞樹　「とはいえ、目的は別ですからご奉仕の報酬が欲しいです。先輩……次は私に、他人から身体を弄られる気持ちよさを教えてくれませんか？」

//★トラック5：先輩わたしも気持ちよくしてもらっていいですか？

瑞樹「あら、もう閉館の時間になってしまいましたか。つい時間を忘れるくらい盛って（さかって）しまいましたね――先輩が。私はまだ、満足しきってはいないのですが」

瑞樹「（耳もとでささやくように）ただ……優しい先輩のことですから、この流れで私のお願いを無碍にはしませんよね？　童貞の男の子が、女の子の身体を弄れるチャンスですし」

瑞樹「……少し休ませてくれ？　まぁ確かに、先輩が私の口に精液をぶちまけたのは、私が勝手にご奉仕したからですし」

瑞樹「……分かりました。では、こうしましょう。賢者タイムがとけるまで、私が今からここでオナニーしますから、先輩は好きなタイミングでそれに加わってください」

瑞樹「ただ、先程も言いましたが、私、自らをうまく慰められないので、早めに先輩の『手助け』があると嬉しいです」

瑞樹「それでは、あまり離れていても見えませんし、この位置で……先輩はあくまで、『お好きなタイミングで』『お好きなように』してください」

瑞樹　「ふふっ、それでは、私の痴態をご覧あれ。オナニーなので軽く脱ぎますが、ちょっとしたストリップみたいですね」

瑞樹　「ちなみに先輩はどこを見ていらっしゃるんですか？　おっぱいですか？　それともおまんこですか？」

瑞樹　「いいですよ？　ほら、先輩、んっ、見てっ……ください。ふぅ、んっ、胸も……下の方も……っ」

瑞樹　「んぁっ、はぁっ……んんっ！　はぁ、ふぅ、んあっ……んん、んっ……んふぅ……」

瑞樹　「あんっ、はっ……んっ、いつもより気持ち良い、ですね……。見てください、先輩、下の方、濡れてきているの、分かりますか？」

瑞樹　「小説では、なんと表現していましたかね……『裂け目に指を折れ入れると、少女は桃色の果実をぱっくりと割り、雌の蜜を搾り出した。蜜を指で絡め取り』……んっ」

瑞樹　「んぁっ、ふぅ……んんんっ、ふぁっ、ご、ごめんなさい、いつもより、ずっと……んん、んっ、ぅあぁ……ずっと、いい感じなので。　んん～、あっ、あ、これ、いい、いいです、いい感じです」

瑞樹　「オナニーって、こんなに……んっ、こんなに、いい……っ！　なんでっ？」

瑞樹　「先輩っ、ほら、見てくださいっ、女の子の濃ゆい蜜ですよっ。雌汁（めすじる）ってこのことなんですねっ」

瑞樹　「中も、んぐっ、ああっ、ほら、ぐちゅぐちゅって音に、んんんああっ、はっ、はあっ、ああっ、んんんんっ」

瑞樹　「先輩に見られながら……がこんなっ……に興奮するなんてっ……驚きです」

瑞樹　「先輩、見て、あああっ、ほら、私のオナニー、あられもない姿、見てくださいっ。んあっ、はぁっ、はぁ……ん〝っ、み、見てくださる、ほど、胸の、ぉくが、ゾクって……っ」

瑞樹　「やっと、やっと分かりました、あ〝の本の描写、んんっ、確かに、ぴったりです、いいっ、凄いっ」

瑞樹　「本ではこの後、男の目が血走るんですけど、先輩は、どぅ、ですか？　興奮してきましたか？」

瑞樹　「ふふっ……先輩……の、おちんぽも……また大きくなりはじめって……ますね。……んんん～っ、ふぅ、んあああっ、はあ、はぁ、ん〝っ！」

瑞樹「あ、気持ち……いいっ、先輩、私の全部……全部、見てくださいっ！　声もっ……！　ああんっ、はっ、んんぅ、んっ、あああっ」

瑞樹「はっ、ん、あっ、ごめんなさい、先輩、何か、何か来ます、んんんん～、ふっ、んんっ、んああっ」

瑞樹「来る、来ます、んんんあああああっ、すみません、ごめんなさいっ、先輩っ、あああああぁ、あぁ、あ、あああっっ」

瑞樹「はあ、ふぅっ、はぁ……。こんなに、気持ちよくなるなんて……想定外でした。先輩のおちんぽは……すっかり元気になっているのに、一人勝手に淫れてしまったのは反省です」

瑞樹「この感覚を小説と比較するなら……」

瑞樹「きゃっ！？」

瑞樹「先輩、急に押し倒さないでください……そんながっつかなくて……ひゃっ！？　い、いきなり指挿れられ……っ、んあぁっ、指が入ってくるっっ」

瑞樹「あ、あ、ああ～っ、ダメっ！　んっ……イった……後は……敏感っ、という話は耳にしていましたが、まさか……これほどっ……までとは……」

瑞樹「ドロドロのおまんこの入り口にぃ……指があてがわれてっ、そのまま入り込んで……ぐちゅぐちゅぅぁっって……あっ、んんんっ、先輩っ、ですからいきなりぁぁっ！」

瑞樹「ダメ、凄い、凄いですっ、あああああっ、んはぁっ、んっ、指、指曲げないでくださいっ、おまんこの壁押されっ、んんんっ、んん～！」

瑞樹「んあああっ、んぐっ、ああんっ、でも、いいっ、凄いっ……気持ちいいですっ。肉壁を引っ掻くように指がっ、あっ、いいですっ」

瑞樹「不思議ですけど、私の指でやるより気持ちいい……ですっ」

瑞樹「んあああっ、んっ、あっ、ふうぅ……んんっ、はあ、はあ……っ、ああ、んんん～～～っ、あっ、ぁんっ」

瑞樹「先輩っ、そのっ、遠慮されなくとも大丈夫ですからっ。私も……興味ありますのでっ！　小説では……もっと激しいことをしていた……のでっ」

瑞樹「出し入れ……だけでなく、指を……もっとっ、私のおまんこの中で……動かしてみてくださいっ」

瑞樹「んあああああぁぁぁっ！　んっ、ふうううぅっ、ふうぅっ、んぁぁっ！　これ、これいいです、二本の指が別の生き物のように動いて……っ」

瑞樹「んふぅっ、あっ、そう、思い出しましたっ！　小説だと、蟲のように蠢いて、なんてっ、ああ、あ゛あ゛っっっ、気持ちいいですっ、おまんこの中、二匹の蟲が駆けずり回って、気持ちいいっ、私、また気持ちヨくなってきてますっ」

瑞樹「先輩っ、お豆……も、クリトリス……も弄ってみてくださいっ……おまんこの上の方、そう、そこっ…も……んっ！あっ、ああああっ、ああっ……！」

瑞樹「あっ、ダメ！……ダメじゃない……けど……またキちゃうっ！先輩っ、そのまま……やめないでください っ、ダメっ、あっ、イきます、イっ、あっ、あああああああ～～っっっ！！」

瑞樹「はあ、はひゅっ、ひっ、ひゅっ、はあぁっ、ふぅっ、はぁ、はぁっ、ふぅっ、はぁぁ、ふぅ、ふう、はぁ……」

瑞樹「はぁっ、あ、ありがとうございます、先輩……。クリトリスは、少し刺激が強すぎましたね。普段あまり弄っていない分、慣れていませんでした」

瑞樹「それに……しても、驚きの連続です。心臓はまだだいぶ跳ねていますが。……こんなに綺麗にイけると……クセになりそうですね。先輩もおまんこをまさぐって……いかがでしたか？」

瑞樹　「……ここで視線を外すのは、いかにも童貞の反応ですね。人のおまんこをぐちゅぐちゅしておいて、酷い人です」

瑞樹　「先輩は、もう少し女の子の言動に対して機微に強くなっていただきたいですね。できればエスコートしてもらいたいところなのですが」

瑞樹　「ようやく呼吸も戻ってきましたし、そもそもに私はまだ目的を果たしてはいませんよ？」

瑞樹　「先輩だってすっかりご自慢の物をおったててますし、……私の気持ち――私が何を欲しているか、読み取っていただけますよね？」

瑞樹　「ふふっ……二度もイッた後だというのに、お腹の内側の方が疼いてきまして、どんどんおちんぽのことしか考えられなくなってきているんです。これでは、昨日の夜から全く進歩していません」

瑞樹　「今処女を捨てなかったら、明日も明後日も、ずっと肉棒のことばかり考えているメスになってしまいます。」

瑞樹　「先輩。先ほどは手マンで気持ちよくしてもらいましたし、今度は私が動きます。ですので……よろしければ、床で横になっていただけますか？」

瑞樹「ありがとうございます。……（ささやくように）それでは、先輩の童貞おちんぽで、処女を卒業させていただきます」

／／★トラック６：先輩の童貞おちんぽで、処女を卒業させていただきます

瑞樹「上からですが、失礼…します……ねっ」

瑞樹「んんっ……！　んっ、ぁ〝っ、んんん〜〜〜っ、はぁっ、ひぃっ、はぁっ、すぅっ……んああっ、挿入り、まし、た……っ！」

瑞樹「たしかに……痛い、痛いですが、……っ。んんっ、先ほどまでの前戯もあって、聞いていたほどではないかもしれません」

瑞樹「これ……を、嬉しいというかなんというか。……痛いだけではなく、腰とお腹の……なんでしょう？　むずむずより大きい衝動があります」

瑞樹「お腹の中、勝手にキュッとして……んんんっ、ふぅっ、はぁ、ごめんなさい、我慢できません、動き方なんて分かりませんが、動きます……ねっ」

瑞樹「ああっ、んんん〜、ふっ、ぅんっ、あっ、腰、くねくね回すの、気持ちいい……っ！　分からない、分からないですけどっ、んんんっ、あっ、いいっ」

瑞樹「はっ、ぁっ、波に合わせて腰動かすと、ぐってなって……んっ、いいっ、いいですっ。あぁ、はっ、ふぅっ、んくっ……！」

瑞樹「はぁあ、ふぅう、んあぁっ、はっ、あっ、んぐっ、ふぅっ、んんんっ、んはぁ、ひぃいっ……！　んん、ぱぁ、んんっ、ふっ……」

瑞樹「ふっ……この、頭は知らなかったのに、身体は知ってたという感じ……ふう、凄い不思議です……っ。何をしなければいけないのか、腰は全部知ってて……っ」

瑞樹「まるで、セックスすることが、元々プログラムされてた、みたいです……っ！　本能……といえばいいのか……気持ちいい　……セックスのために生まれてきたんでしょうか？　それぐらい……んっ、き、気持ちいいです……！」

瑞樹「先輩はどうですか……？　私のリズムでやっていますが、気持ちよいですか？」

瑞樹「刺激が単調にならないように先輩の希望があればお聞きしますよ？」

瑞樹「……ゆっくり上げて、一気に落とす、ですね？分かりました……っ。上下の動きは、まだ少しジンジンしますが……っ」

瑞樹「んつっ……ふぅ～、はぁ～……このくらいからですかね？　では、一気に……んんっ！　あっ、あっ、んんん～、私の子宮にもしっかり届いていますねっ」

瑞樹「んっ、んんぅ……今当たったところ、ぐねぐねするの、いいっ、いっ、んあ〝あ〝あっ、あっ、んふぅっ、んっ、あっここいい〝っ、あ〝っ」

瑞樹「先輩、ごめ〝んなさいっ、ここぐりぐりされるの気持ちよくて、もう他のことっ、んあっ、あ〝あ～っ、考えられなく……なってきちゃいます」

瑞樹「ここ……子宮の口？　奥っ……奥がいいんですっ、ん〝ああっ、はっ、あああっ、ふっ、んがっ、あっ……」

瑞樹「最初は、痛みのほうが強いと聞いていましたが、私、私……おかしいです……痛みもありますけど、それ以上に……んっ、き、気持ちいい……！　あっ、んんん～っ、これ、これおかしくなっちゃいますっ！」

瑞樹「んあああっ、先輩！　んぅ……先輩……は気持ちいいっ……ですか？」

瑞樹「私……はっ……先輩の亀頭が、私の子宮にっ……あたるたびに……ふっ、お腹から……頭にっ、気持ち……いい……刺激が……んん、走ってきますっ」

瑞樹
「ふふっ……先輩も気持ちいいですか……よかったっ……です。……私だけ気持ちよいのでは、ああっ、先輩のっ…おちんぽを使った、オナニーにっ……なってしまいますので」

瑞樹
「ふっ……ん！　それにしても……愛液……ってこんなにも、溢れてくるんですね……」

瑞樹
「先輩……、私もちょっと物足りなくなってきました……しっ、私のおまんこ……先輩の好きに使ってください……っ」

瑞樹
「んひゃっ！？　あっ、んんんっ、んぐっ、ぷはっ、先輩、下から突き上げるの、急です……！　急ですが、き、気持ちいい……っ！」

瑞樹
「あっ、気持ちいい、これ好き、好きです、先輩っ！　んああっ、ひっ、んっ、好き、先輩、好きっ！　気持ちいい、先輩に激しく突かれるの、気持ちいいです！」

瑞樹
「先輩はどうですか？　私の膣内（なか）はっ、ああああっ、っん、ぐぅっ、ああ゛っ、こ……これじゃぁっ……盛りのついた動物と……あぁっ……なんら、変わらないです……ねっ！」

瑞樹
「んん……、嬉しい……本当に嬉しいです、先輩！　お互いに気持ちよくなれる、セックスがっ、こんなに……気持ちいいっ、なんてっ」

瑞樹「本の知識だけでは……んぐっ、はっ、理解できなかった……あぅっ……ですっ！」

瑞樹「ナマの体験っ、あっ、そこ、そこです先輩、そこ突いて……んあああああ〝あ〝あ〝あ〝あ〝ああ
あっ！！　あ〝っ、んんん〝ん〝っ、ああ
あっ！」

瑞樹「あっ、初めてなのに、ぎも〝ぢい〝い〝で
すっっ、奥ごりゅごりゅってざれるのっ、ず
ぎぃ〝ぃ〝っ」

瑞樹「ん〝ん〝っ、先輩、私、もう、もうイっちゃいま
す……っ！　私の、膣内（なか）に……先輩のお
ちんぽが通るたびに、頭が白くなっちゃいますっ
うぅ！」

瑞樹「あっ、んっ、どうせですから、最後も……一緒
にっ……！　せっかくのっ……記念ですから……
あぁ！！　そのまま中にっ！」

瑞樹「先輩の精子と一緒にっ……ひと思いにっ、突き上
げてくださいっ！！」

瑞樹「んっ……そぅ……激しく！　イク！　イクッ！
イクイクッ！　いっちゃいっ……ま、ぁ〝
ぁ〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あああああ
っっ！」

瑞樹「（耳元で）はぁ、はぁ、はぁ……」

瑞樹　「（ささやくように）……気持ちよさで、そのまま意識を失いそうになってしまいましたが、どうにか現実に戻ってこれました」

瑞樹　「さて……、服を着ますので、立ち上がりますが、危ないですから、先輩はそのままで……。んしょっ……」

瑞樹　「はあっ……ふふっ。床も私のおまんこも……ぐしょぐしょですね。入念に掃除しておかないと……」

瑞樹　「ん……？　どうしました？　先輩。」

瑞樹　「……責任をとる？　あぁ、ご心配には及びません。今日は比較的安全な日ですし、今日得られた物の大きさに正直どうでもよくなっていました」

瑞樹　「先輩も、今日は本当にありがとうございました。生での貴重な経験ができましたし、本での情報はもちろん、言葉にできないものも含めて、色々勉強になりましたね」

瑞樹　「ただ……実際に経験をしてみてて、より興味も出てきましたね。……体位の問題ですとか、前戯の種類ですとか」

瑞樹　「ですので先輩……よろしければ、明日もまたお付き合いくださいね」

瑞樹　「え？……彼氏彼女？　……いえ、付き合いというのは明日もセックスしましょう、ただそれだけのことです」

瑞樹　「先輩がどういうお気持ちかは察しかねますが、私の方からは、別にそういった関係について関心もありませんので、お付き合いはご遠慮させていただきます。」

瑞樹　「あ、それよりも時間もありませんし、早く掃除してしまいましょう。これ以上遅くなっては、流石に色々面倒ですし、ね？」

／おわり